



動物をかたどった装飾土器

高山市赤保木遺跡出土 縄文時代中期
岐阜県文化財保護センター蔵

高山市の縄文時代中期の集落遺跡から見つかった土器です。土器の中央部分には、土器にしがみつくようにした何かの動物の背中が見えます。よく見ると、大きな目や格子状の背中模様、手足も表現されているようです。カメでしょうか？カエルでしょうか？縄文人の想像上の動物かもしれません。このような動物をモチーフとした飾りをつけた土器は、飛騨地方や長野・北陸地方で見つかっています。

(企画展「タイムスリップ!大むかしの暮らし」にて展示)

歴博草創のころ

岐阜市で博物館建設が本格化したのは昭和55年(1980)でした。同年、有識者で構成された岐阜市博物館建設専門委員会が設置され、9月には基本構想案がまとまりました。その基本構想案で、展示・収集・調査研究・教育普及という従来から博物館として期待されていた機能とともに、郷土研究や文化活動を支援するための情報提供を活動の柱にすることが高らかに宣言され、常設展示は「金華山と長良川流域文化の歴史」「長良川の鵜飼」をテーマにすることが提言されたのです。当時、建設専門委員会でも主導的な役割を果たしたのは、すでに鬼籍に入られた岐阜大学の野村忠夫先生、名古屋大学の榎崎彰一先生、京都国立博物館の八賀晋先生らでした。委員会では、岐阜県を代表する人文系博物館を創るんだという先生方の熱気にあふれ、席上ではなかなか結論がでなかったことも多かったように記憶しています。

昭和50年代は、日本各地で地方の中核となる博物館が新設された時代でした。岐阜市周辺でも、昭和51年、岐阜県博物館、同52年、名古屋市博物館、同53年、愛知県陶磁資料館(現愛知県陶磁美術館)といった大型の博物館がオープンしています。

この時期に開館した歴史系博物館では常設展示に大型のジオラマや複製を多用するというのが一般的でした。建設専門委員会部会で検討を開始した展示基本計画案も当初歴史ストーリーが先行し、それを表現するのにふさわしいジオラマのテーマや複製すべき資料の検討がすすめられていました。しかし、展示設計に入る段階になって、岐阜県博物館がすでに開館していたこともあり、その展示手法とは一味違うものにするのが求められ、国友俊太郎氏(日本エキジビジョン)に設計を依頼することになったのです。打ち合わせがある度に、展示はいかにあるべきかというご高説を国友氏から延々のご教示いただいたことをよく覚えています。博物館はストーリーでなく「もの」を中心にすべきだ、というのが国友氏の基本的な考え方です。そして、ケースの展示台の上だけでなく壁面いっぱい資料を展示し、展示ストーリーはケース外のパネル展示にするという当初の常設展示室ができあがったのです。

開館記念特別展として当初、岐阜県内の文化財を集めたものが検討されていましたが、徳川美術館名品展を開催することになった経緯にも国友氏

がかかわっています。当時、徳川美術館の作品を海外で巡回する展覧会が開かれていましたが、その展示設計も国友氏が手掛けていました。新設の博物館が開館記念に徳川美術館の名品展を開催できたことが、業界内でもひとつのステータスになったと思います。続いて、五島美術館展・出光美術館展・サントリー美術館展といった特別展を開催できたのも、その成果です。

昭和50年代の歴史系博物館の常設展示でジオラマや複製が重視された理由のひとつは、母体となる博物館もなく、コレクションももたず、博物館が草創されたという事情もありました。そのため、建設専門委員会とは別に資料評価委員会を組織して、積極的にコレクション形成につとめました。コレクションの範囲は、美濃地域に直接かかわるものが主でしたが、当初から戦国時代に関わるものについては、全国的な視野に立って収集してきました。また、岐阜市歴史博物館で展示するだけでなく、他館に貸し出すことができるかということも同時に考えていたのです。その結果、南蛮漆器や戦国合戦図屏風などの特色あるコレクションが形成され、近隣だけでなく日本各地の博物館に当館の所蔵品を貸し出すことができるようになりました。

現在は収蔵庫もほぼ満杯で、なかなか外部の資料をお預かりできないことも多いのですが、当初は余裕がありましたので、寄託という方法で岐阜市内の貴重な文化財を博物館でお預かりできるよう所蔵者にご案内していました。比較的早い段階で、信長の制札を所蔵する円徳寺や斎藤道三・義龍画像を所蔵する常在寺から寺宝をお預かりでき、収蔵庫で国の重要文化財を管理しているという実績にもなり、後に国宝・重要文化財公開承認施設に認定される糸口にもなったのです。

岐阜市歴史博物館がうまれた時代は全国各地で博物館が誕生し、各博物館がそれぞれ特色をだそうと努力した博物館の戦国時代といった状況でした。現在は、各館とも事業運営に安定した天下泰平の時代に入ったようにも思えます。しかし、日本全体でみると、余暇の多様化、歴史離れ、インターネット情報の充実などもすすみ、博物館に対するニーズは30年前と比べると一変しています。生き残りをかけた博物館界の新たな戦国時代に対応できるよう、これから博物館を運営していく人々には今から戦支度をはじめてもらいたいと思います。

(土山 公仁)

企画展

タイムスリップ！ 大むかしのくらし

2017.3.24(金)～5.21(日)

この展覧会は、平成19年に、小学校6年生のための体験型ミニ展覧会として始まり、形を変えながら今回で10回目の開催となります。歴史を初めて学ぶ子どもたちが抵抗なく歴史の世界に入っていけるように、さまざまな工夫を凝らしています。展示では、原始・古代の生活のなかで使われるさまざまな道具を復元し、それらを使う体験コーナーを展示の中心にしています。当時の人々の知恵と技術を実際に体験することで、社会の様子や時代背景の理解を助けます。遺跡から出土した資料の展示とあわせ、大むかしの人々のくらしを肌で感じることで、教科書に戻ってからよりも学習内容に親しみやすく、歴史を身近に感じられることでしょう。

今回は、「お米だけ？ 弥生人の食事」と題し、弥生時代の人々の食生活を集めるコーナーを新設しました。教科書でも、弥生時代に稲作が始まり、お米を食べるようになった、と書かれています。では、当時の人々は何のくらいお米を食べていたのか、ほかにはどんなものを食べていたのか、想像できるでしょうか。

遺跡から見つかった資料からは、お米だけを主食にするには、当時の収穫量は少なかったことがわかります。遺跡からは、アワやヒエなど



体験コーナー「石の皿を使ってみよう」

の雑穀や、クリやトチなどの木の实が見つっています。人々は少ないお米にそれらを混ぜて、かさを増して食べていたのでしょう。

畑作や家畜を飼う、ということが始まったのも弥生時代です。現在のところ、九州から愛知県までの遺跡で家畜化されたブタの骨が出土しています。また、弥生時代の人々が、ウリやゴボウ、コムギ、オオムギ、ダイズ、モモなど、私たちにもなじみの深い作物を育てていたこともわかっています。弥生時代といえば米作りばかりが注目されますが、縄文時代以来の狩猟採集で得た食料に、大陸から入ってきた新しい食文化を取り入れた弥生人の食卓は、想像以上に豊かだったようです。展覧会では、弥生時代の食事を模型で復元し、展示します。

体験コーナーとともに展示資料もさらに充実し、子どもも大人も楽しみながら学べる展覧会です。

関連行事も多数開催！

■講座「石の矢じりをつくろう」

日時：5月20日(土) 午後1時～4時

講師：美濃考古学研究会 後藤信幸さん

■ワークショップ「ミニチュアの土器をつくろう」

日時：4月9日(日)、4月29日(土・祝)、
5月7日(日)

①午前10時30分～11時30分、

②午後1時30分～2時30分

協力：岐阜縄文土器クラブのみなさん

■ワークショップ「石のアクセサリー（まがたま）をつくろう」

日時：3月26日(日)、4月2日(日)、
4月23日(日)、5月3日(水・祝)

①午後1時30分～2時30分、

②午後2時30分～3時30分

■イベント「火おこしにちょうせん」

日時：4月30日(日)、5月5日(金・祝)
午後2時～4時

※詳しい参加・申込方法、定員等については、ポスター・チラシ・ホームページをご覧ください。

歴博セレクション

三輪山真長寺所蔵仏画展 —仏画修復事業を通して—

2017.6.2(金)～6.25(日)

真長寺は岐阜市の北東端にあたる三輪山の南麓に位置する真言宗古義派の古刹です。その創建は古く奈良時代とも伝わっています。

本尊は丈六（一丈六尺、約4.85M、坐像の場合はその半分）の釈迦如来坐像で、平安時代後半に活躍した仏師定朝の様式を伝え、重要文化財に指定されています。

古代以来中世にかけて栄えた真長寺も転換期を迎えます。江戸時代の覚書を見ると、永禄元年（1558）に火災に遭って多くの書物が焼失したことがわかります。その後、織田信長、豊臣秀吉と為政者は変遷し、寺観は退転していったようです。かつて堂塔は本堂のほかにも惣門、仁王門、二重塔等が存在し、塔頭は12坊を数えましたが、慶安2年（1649）には、本堂と鎮守を残すのみとなっていました。

真長寺に再び転機が訪れたのは徳川の治世になってから



焰摩天像
14世紀 鎌倉～南北朝時代

でした。寺領は17石7斗が認められ、三代将軍徳川家光以降、朱印地となりました。現在、真長寺には歴代将軍の朱印状が伝えられ、本堂には御位牌が祀られています。

永禄元年に罹災したにもかかわらず、寺には平安時代の本尊をはじめ、鎌倉から室町時代の仏画が残されており、火災のなかで什宝を護りぬいた人たちの姿をうかがうことができます。また、寺領が安定したことで寺の維持とともに、寺宝も守り伝えていくことができるようになったのでしょうか。仏教の護法善神である天部十二尊を一揃えとする十二天図には、鎌倉時代の作品や江戸時代に補われた作品が混在しています。

そうした什宝を未来へとつないでいく営みは今日まで続いています。平成10～11年（1998～99）には釈迦如来坐像の戦後二度目の修理がおこなわれました。また、仏画も三輪山真長寺文化財保存会の活動により、順次修理が進められています。

本展では、保存活動を紹介しながら、真長寺より当館へ寄託された仏画類を中心に真長寺のいまをご堪能いただきます。



釈迦涅槃図 14～15世紀 鎌倉～室町時代

加藤栄三・東一記念美術館

栄三・東一 花のいのちを描く

2017.4.25(火)~7.9(日)

季節によって豊かな表情を見せてくれる花は、古来より多くの画家たちによって描かれてきました。

花や鳥・虫などを主題とし描く分野は「花鳥画」と呼称され、山水画、人物画と並ぶ東洋絵画の一部門として独特な発展をしながら今日まで受け継がれ、その作風は生花同様、多くの人々を魅了してきました。

自然の美の代表として描かれてきた花は、豊かな潤いをもたらすと同時に散りゆく花に哀感をそそられる人もいるのではないのでしょうか。

岐阜市美殿町出身の日本画家：加藤栄三・東一も、花の魅力に惹かれ多くの素描（スケッチ）・本画（完成作品）を描きました。



「筆洗桶」東一

東一は「花」についてある対談で次のように語っています。

「一つの雑草を見たときに、新しい感動で見られるといいと思うね。キザになるかもわからないけど、一木一草の命みたいなも

んがね、感じとれればと思うな。私たちは雑草と呼んでいるけれども、それは人間の側の勝手なことで、草そのものをよく見ると、一本一本、みんなやっぱりすごく美しい。これはやっぱり神様でなきゃつくれない、まさに造化だと思う。」

栄三はある対談で次のように語っていません。

「今日は散る花、明日はこの花を見ることはできないかも知れないけれど、その時見る花、その時見る草に限りない愛情を込めて、あるいは見つめ、あるいは見送る。その明け暮れです。写生はあるがままのある時の私です。私は懸命に写生に打ち込むことによって、より新しい自分の道を切り開いていこうと考えています。」



「熱帯の花」栄三

栄三・東一は、「一期一会」の気持ちで草花との瞬間の出会いを大切にし、いずれ枯れゆく花に永遠の命を吹き込むことができないのかと、精魂を込めて多くの花鳥画を描きました。二人の草花に寄せる思いは同じだったようです。

本展では収蔵作品の中から、パステル・墨・水彩などで描いた素描とともに、新たにご遺族からご寄贈いただいた作品を加え初公開作品として展示いたします。

身近な草花を題材に選びながら繊細かつ巧みな技法で命を吹き込まれた栄三・東一の作品をとおして生命の尊さ、日本の自然美のすばらしさを再認識していただければと思います。

若き日の信長公に変身!!

織田信長が1567年に岐阜に入城し、地名を「岐阜」と命名してから450年。2017年、岐阜市では「信長公ゆかりのまち・岐阜市」として、「岐阜市信長公450プロジェクト」を推進しています。

歴史博物館では、1月～3月の家庭の日を除く日曜日（全9回）、「若き日の信長公」に変身したみなさまにノベルティグッズをプレゼントしました。家族連れなど多くの方が、信長の衣装を身に付け、戦国時代にタイムスリップしました。

「信長は、ぼくにとってヒーローです。」「頭がよく、戦上手な信長が好きです。そんな信長に変身できてうれしいです。」信長ファンである男の子はこう語っていました。

総合展示「戦国ワンダーランド」内、反物屋にて、着付け体験をすることができます。ぜひ、みなさんも信長に変身してみませんか。



■分館 加藤栄三・東一記念美術館の展示■

本誌5ページで紹介した以外の分館展覧会は以下の通りです。

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 4月23日（日）まで | 開館25周年～感謝を込めて～ 所蔵作品展 |
| 4月23日（日）まで | 二紀会と歩む 小川 斉 洋画展 |
| 4月25日（火）～5月28日（日） | 生命の雫 長谷部 貞子 日本画展 |
| 5月30日（火）～7月9日（日） | 清雅恬淡の境地を求めて 伊藤 天游 回顧展 |

■特集展示（2階 総合展示内）■

2階の総合展示の一角に特集展示室を設置し、1～2ヵ月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。これからの日程は次のとおりです。

- | | |
|------------------|---------------------|
| 4月9日（日）まで | 物語の浮世絵 |
| 4月14日（金）～6月4日（日） | 胡麻の油と…—江戸時代の年貢の納め方— |
| 6月9日（金）～7月9日（日） | 加納鉄哉 |

■分室 原三溪記念室の展示■

原三溪ゆかりの人物や資料をテーマに、随時、一部展示替えをしています。これからの日程は次のとおりです。

- | | |
|-----------------|------------|
| 4月7日（金）まで | 三溪の祖父 高橋杏村 |
| 4月8日（土）～6月2日（金） | 三溪と近代の金華山焼 |

上記の日程は、都合により変更する場合がございます。ご了承ください。

平成28年度受贈資料

平成28年度は、表記の皆様に貴重な資料をご寄贈賜りました。
厚くお礼申し上げます（50音順、敬称略）

・岐阜市歴史博物館

芳名	受贈資料	
市原佳代子	近現代生活資料	一括
大野 博良	大野操氏資料	一括
齋藤 清	原三溪関係書籍	5件
酒井 勉	ワイン樽	1点
	御使僧巡廻記	1冊
鈴木 忠士	戦時中の子供用茶碗	1点
増田 寿	鮎釣竹竿	1本
	引き舟	1点
	タナゴ釣竿	1本
	ビク	1点
吉田二三子	吉田コレクション	一括

・加藤栄三・東一記念美術館

芳名	受贈資料	
青木 孝充	加藤栄三「爽原」(本画)	1点
	加藤栄三「春」(本画)	1点
	加藤栄三「唐三彩壺」(本画)	1点
	加藤栄三「壺」(素描)	1点
	加藤栄三「鮎」(素描)	1点
杉山 幹夫	加藤東一「伝承」(本画)	1点



加藤東一「伝承」

***** 館蔵資料紹介 *****

金箔鯨瓦

戦国時代 岐阜市歴史博物館蔵 長さ28.2 cm 幅13.0 cm 厚さ 5.2 cm

昭和32年（1957）8月13日、岐阜タイムズ（岐阜新聞の前身）学芸欄に、岐阜県文化財審議会委員などを歴任された小川栄一氏による「岐阜城金箔鯨瓦現わる」という記事が掲載されました。岐阜城の金箔瓦が初めて活字で紹介されたのはこの時です。小川家に残る栄一氏の元原稿を併せて読むと、同年7月16日、出品物をたずさえ岐阜城天守にでかけた栄一は、信長の制札（現在は重要文化財）などを持参し、その説明文を書いている松田亮氏に出会い、松田氏から天守の北崖下から採集したばかりという金箔瓦の破片を見せられたのです。栄一は後日、拓本などをもって調査し、岐阜タイムズの記事になったのです。

昭和43年、松田氏も「岐阜城古瓦考」（『城』38号 東海古城研究会）を発表。それに注目した中村博司氏は、松田氏をたずね調査して、「金箔瓦試論」『大阪城天守閣紀要 8』（1980）でこの鯨瓦を取りあげています。この資料は数々の文献で紹介されてきたものですが、永らく松田氏の手元にあったため、過去当館で発行した図録等では紹介できなかったものです。

小川氏はこの金箔瓦を永禄12年ルイス・フロイスの岐阜訪問以後に建てられた天主に使われたもので安土城に先行すると考えました。松田氏もその説に同調しています。この瓦が契機になって岐阜城でも金箔瓦が使われていたことが注目されるようになり、金箔の痕跡が残る瓦が数点採集されていますが、軒瓦を見ると、安土城同様凹部に金箔が施されています。（大坂城以降は凸部に施されます）。安土城や大坂城では金箔の接着に漆が使われることが多いのですが、岐阜城山頂部から採集された金箔瓦の下地は黄褐色になっており、接着材が不明です。このことは、金箔瓦の制作が定型化する前の未熟な段階ともいえそうですが、考古遺物という資料の性格上、特別に紀年銘でも記されていない限り、ピンポイントで時代を特定することは難しいのが現実です。

なお、松田亮氏は戦前から郷土史研究の分野で数多くの足跡を残しています。没後、ご遺族から松田亮氏が収集されたさまざまな資料の寄贈を受けましたが、この鯨瓦もそのひとつです。



利用の御案内

- **開館時間** 午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
- **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日、
年末年始（12月28日～1月3日）
(月曜日が祝日の場合はその翌日)
※特別展・企画展開催中は変更することがありますので、
ご注意ください。
- **観覧料** (団体は20人以上)
歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館
高校生以上 300円 (団体240円)
小中学生 150円 (団体90円)
両館共通で観覧される場合
高校生以上 510円 (団体410円)
小中学生 250円 (団体150円)
- ◎下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。
①岐阜市在住の70歳以上の人
②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳の交付を受けている人、およびその介護の方1人
③岐阜市内の小中学生
- ④家庭の日（毎月第3日曜日）に入館する中学生以下の人と同伴する家族（高校生以上）の方
企画展は、総合展示料金でご覧いただけます。
特別展は、その都度料金を定めます。
- **交通案内** JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。
岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

博物館だより No.95 2017. 3
編集・発行 岐阜市歴史博物館
〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ☎058(265)0010
(分館) 加藤栄三・東一記念美術館
〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ☎058(264)6410